

今、教育の重要なキーワードとなっている「言語活動の充実」はコミュニケーションの力と深い関わりがあります。両者がどう関わり、その力をどう育てていけばよいのか、鼎談・インタビューで取り上げながら、これからの教科書の方角性を考えていきたいと思います。



言語活動を支える コミュニケーション力

イラスト：後藤美月 撮影：鈴木俊介

鼎談

言語活動は、 協働的な学び

横浜国立大学教授 高木まさき

早稲田大学教授 森山卓郎

明星大学 特任准教授 邑上裕子

子どもたちの

コミュニケーションの現在

言語活動を支えるコミュニケーションの力、その育成に必要なこと。それから、次の教科書で実現したいことについて、三人の編集委員の先生方に語り合っていました。



高木 ここ十年ほどで、大学生のコミュニケーションのあり方が大きく変わった感じがします。昔は、四年生が自然と三年生の面倒をみていた。でも、今は指導しないと、お互いに深く交わらない。人前で話すことが上手な学生は多いのですが、それが人と人とのコミュニケーションにつながっていないのかもしれない。型や知識・技能は身につけていても、思考力やコミュニケーション力には課題があるように思います。

邑上 形としては成り立っていても、「通じ合ってよかった」というコミュニケーションにはなっていないんですね。



言葉を用いた活動は、 常に相手との 相互作用の中で 行われるもの。



たか き
高木まさき

静岡県生まれ。横浜国立大学 教授。同大学教育人間科学部長。中央教育審議会国語専門部会委員、学習指導要領の改善協力者、「全国的な学力調査の在り方等の検討に関する専門家会議」委員、「言語活動の充実に関する指導事例集」作成協力者など。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）ほか。光村図書 小学校・中学校「国語」教科書編集委員を務める。

だと思えます。ただ、子どもたちが本当に自分の頭で考えてその言語活動に参加しているのか、疑問に思える授業も目にします。**高木** 同感です。言語活動の取り組み方には三パターンあると思っています。一つ目は、ただ活動をさせるだけ。二つ目は、知識・技能を教えて活動をさせるもの。そして、三つ目は、それを通して思考力を身に付けさせることができるもの。残念ながら、現場では、一つ目、二つ目の授業が多いような気がします。

森山 「し合う」言語活動を充実させるには、そのもととなる自分の考えをしっかりともてるような、一人一人の力が耕しが不可欠でしょうね。同時に、その一人一人の考えの違いを大事にできることも必要です。そうでないと、「し合う」ことが本当に生きてきません。

森山 「場性」や文脈が大事なんです。高木 抽象的に何かを正しく伝えるのではなく、具体的な相手に向けて何が必要かを考えることで、論理的な文章や話が形成されるということです。論理は、文脈や状況、

森山 三年前まで幼稚園の園長を務めており、こんな光景を目にしました。うちの園ではないのですが、ある子がブランコに乗っていたところに、別の子がやって来た。その子はブランコに乗りたかったようで、「順番を」カワッテ。カワッテと、壊れたレコードのように繰り返すだけで、ブランコに乗っているほうの子は知らんぷり。

森山 言葉が届いていない。**森山** そう。言葉を発してはいても、全く血の通ったものになっていないんですね。異年齢で遊ぶことが少ない、大人の監視下でけんかなどを起こさないようにしているなど、人と関わるたくましさのようなものが薄れている気がします。

森山 変化は、幼児教育段階から出てきているのかもしれないね。**高木** 変化は、幼児教育段階から出てきているのかもしれないね。**森山** 私のも昨年の三月まで、小学校長と兼務で、幼稚園長をしていました。人前でのパフォーマンスは上手だけど、自分の言葉で説明することが苦手な子が増えているように感じます。

森山 借り物ではない、「我が物」としての、実際の生活で伝え合うためのコミュニケーション力の重要性を強く感じます。

森山 小学校の現状としては、ともかく子どもたちの多様化が進んでいるといえます。今、地域によっては、十数か所の保育所・幼稚園から一つの小学校へと、子どもたちが入学してきます。それぞれの幼児教育を経て集まるので、入学時にはかなりの個人差がある。そんななか、小学校生活になじめない子が多いようです。

「し合う」という協働性

森山 平成十年告示の学習指導要領と現行のもので、「国語」の中に「し合う」という表現がいくつ使われているか調べたことがあるんです。平成十年では九か所、現行では二十四か所でした。ここに、「みんなで学ぶ」という意識が見て取れるのではないのでしょうか。ですから、「し合う」という言語活動を大切にするのはよいこと





話し合いとは、 自分の頭で考えて、 協働的に論理を 形成すること。



もり やま たくろう
森山卓郎

京都府生まれ。京都教育大学教授を経て、早稲田大学 教授。博士(学術)。主な著書に『ここからはじまる日本語文法』(ひつじ書房)、『日本語・国語の話題ネタ 実は知りたかった日本語のあれこれ』(同)、『日本語の〈書き〉方』(岩波書店)、『国語教育の新常識』(共著・明治図書)など。光村図書 小学校・中学校『国語』教科書編集委員を務める。

相手や目的に照らし合わせることで力を発揮する。論理だけに限らず、言葉を用いた活動は全て同じです。常に相互作用のなかで行われる。ですから、お互いにさまざまな違いを出し合いながら学習していくことに意味があります。こういった学びの協働性が重視されていることも、言語活動の充実が求められる理由の一つではないでしょうか。

「話す・聞く」の 学習とつづ

邑上 私が長年、実践や研究に取り組んできた「話すこと・聞くこと」の学習でも、



大きなことです。瞬時に替わる聞き手と話し手を育てることを、大事にしているのだからうと受け止めています。

森山 確かに、態度だけでは不十分です。実際に話し合いを深めるための言葉を、発言のいわばフレーム作りの手立てとして獲

得させるといふ指導も考えられますね。「なるほど」「そうすると」「でも」など、話し合いで大切な、相手の話を受けて、自分なりの思考を展開させるような言葉です。先ほど、高木先生がおっしゃっていたように、一人一人に思考力を身につけさせ、教室のみんなが必ず考えないといけない授業作りが望まれるように思います。

高木 そうですね。話し合いには、話を「受け止めて掛け合う」ような力が必要なんです。ですから、知識・技能として、「そうは言っても」という言葉を知っていて使えれば、逆接的に返すことができる。思考を引き出す言葉を身につけておくのは大切です。ただ、それだけでは足りないと思うんです。相手の話したことについて知識や興味が全くなければ、「そうですね」としか返せない場合もあるでしょう。ある程度、共通の土台があれば、掛け合いにはならない。土台となる、問題意識や知識などを同時に育てることも課題です。そして合わせて、「話し合うよさ」が実感できる経験を積み重ねていけるといい。それが、日常に生きる力につながるのではないのでしょうか。

すが、それが本質になってしまうのはよくない。相手の話の内容についての知識がなくとも、自分が、違うことについて考えた経験があれば、「どうして」「それはどういうこと」と返すことができるはず。自分の頭で考えて、協働的・対話的に論理を形成する。それを育てるのが、単なる型ではない、本当の話し合いなのではないでしょうか。

高木 自分が知らないことについても、一歩踏み出してある程度考えて、話を関係づけたら広げたりする。そういう思考力を大事にしていかなければなりませんね。

邑上 全く同感です。

森山 みんながしつかり発言できるといふ力の耕しと、それからもう一つ、活動のリアリティも必要かもしれません。つまり、その言語活動に「本当に何かのために主体的に考えるんだ」と切実感をもって取り組めること。そうでないと深まりませんし、「やってよかった」という実感も得られません。邑上先生、実際の指導としては、うまくできない子にはどのような手立てが考えられますか。

邑上 悩ましい問題ですが……私は、「みんなが経験する」ということは小学校教育でとても大事だと考えているんですね。で

すから、話し合いでは、司会などの役割を、どの子にも必ず経験させることがまず必要です。それから、型は教えますが、それが自分なりの型や言葉に発展していくといいなと思います。「僕は〇〇さんの意見に賛成です」ではない、その子なりの生きた言葉が出てくるはずなんです。さまざまつなぎ言葉を出し合わせて、「〇年〇組のつなぎ言葉」を作ってもいいですね。

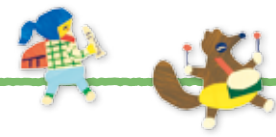
森山 それは、子どもたちから出てきたものを、生き生きとしたモデルとして、お互いに学び合うということですね。

邑上 時間数が足りなくて、なかなか話し合いが深められないのが現実ですが、「答えを出す」ことよりも、「二人一人が考えをもち合って、つなげ合いながら交流すること」を重視できればと思います。

「活用できる教科書」 に向けて



高木 モデルという点では、自分自身、実感していることがあります。学生時代、卒論を書くために、恩師の先生の本を読みあさったのですが、そうすると、だんだん先



生の考え方が乗り移ってくるんですよね。違う研究テーマでも、「先生だったら、この事象を前にしたらこう考えるはず」と考える。今でもそうです。それは引用ではなく、考え方が自分の中にあるということ。

考える、つまり物事をどう関係づけるかということとは、「自分の中にどれだけモデルをもっているか」によるものだろうと思います。いくつものモデルを融合させて、自分のものにしていく。学生たちを見てみると、それがないんだろうと思うんです。読むことを通してそうしたモデルを獲得してきていないのでしょうか。今、インターネットで膨大な情報が手に入ります。しかし、重要なのは情報ではなく、その結論に至るまでの考えの道筋。考え方のモデルなんだと考えています。

邑上 教科書でいえば、主に説明的な文章が果たす役割が大きいのでしょうか。

高木 そう。教科書では、筆者一人一人のものの見方・考え方が表れているような、個性ある文章が掲載されているように思います。これは非常にいいことで、今後も続けていきたい。考えの道筋に、多く触れるのは重要ですからね。それが、コミュニケーションの土台作りとなるはずです。その意

味で、授業では、説明的な文章、特に資料として位置づけられているものをもっと生かすという視点が必要な気がします。

邑上 「手と心で読む」(四年上)、「平和のとりでを築く」(六年)のようなものですね。

高木 ええ。ものの見方・考え方は表現のしかたに表れる。授業では、活動のための話題提示としてだけではなく、考えのモデルに触れるような読み方をしてもらえたらと思います。

森山 他の説明的な文章も、論理と具体的な表現の方法を押さえるように学習してもらえればいいですね。新版の教科書では、さらに、豊かな文章を数多く用意していく必要がある。そうすれば、文章をもっと生かされますし、他教科でも使える力となります。

邑上 賛成です。題材や使われている言葉に興味をもって読むことも否定しませんし、大事なことです。ただ、せっかくですから、授業では、書きぶりから考えのモデルを学ぶというところまでもっていつてもらいたいと思います。

高木 それから、「書くこと」では、作例に示された、書くときの観点に立ち止まってもらいたいですね。これも、ものの見方・

考え方の一つ。子どもたちが多くのモデルを身につけられるよう、新版でも観点を充実させたい。

邑上 少し視点を変えて、子どもたちが見通しをもって学習に臨み、身につけたことを自覚できるというのも、一人一人の力の耕しには重要です。その際、今の教科書の「話す・聞く」「書く」単元の冒頭にある「活動の流れ」というチャートが役立ちます。教師が見通しをもつための示唆にもなりますね。現場でも、「使いやすい」という声をよく聞きます。

高木 自分のしていることを客観的に捉えて認識する、そういう「メタ認知」の力は思考力と強く結び付いています。その点において、活動の流れを視覚的に認識し、イメージしながら段取りを組んで取り組むというのは大切なことですね。振り返りにも使えます。

邑上 活動の大きな流れとともに、特にどの部分がポイントになるのか分かるように、もう少し踏み込んで示してもいいかもしれません。そうすれば、子どもたちが自分为主体的に学習を進めていきます。

森山 学習内容の焦点化にもつながることですね。教師が指導するときにもその意識

があれば、子どもたちを適切に評価し、できない子への手立てを考えることがしやすくなります。

高木 例えば、スピーチは、話題設定や取材、構成、話すことなど、さまざまな要素の集積の上に成り立つこと。スピーチのどの要素が弱いのかは、その子によって違うはずです。多様な子どもたちがいるなかで、一人一人の状況を把握しなければならぬわけですから、一つの言語活動を分割・分析する目をもち、どの要素に焦点化して指導するか考えるのは重要なことです。

森山 そうして、一人一人の思考力やコミュニケーションの力を耕し、ともに「し合う」学習を通してみんなが高まっている

ければ、それは素晴らしいことです。そのために活用できるように、新版ではさまざまな工夫をしていきたい。先生方にはぜひ期待していただきたいですね。

邑上 みんなでいいところを引き出しながら、共有して高め合っていく。それが協働的な学びです。新版の教科書がどんな提案をしているか、楽しみにしてもらえたらと思います。

森山 教科書の活用と合わせて、子どもたちのなかから、よいモデルをどんどん取り上げて、褒めてもらいたいです。教師が褒めるという、温かい励ましの力を発揮していけるといいですね。

高木 本心に。大人だって褒められるとう

れいでものね。それは、教科書が新しくなっても、変わらずに大切なことです。先生方の授業の力あってこそその教科書です。新版はより活用できる教科書を目指していきますから、授業で使っていたくのが今から楽しみです。



むら かみ ゆう こ
邑上裕子

東京都生まれ。小学校教諭、立川市教育委員会指導主事、東京都教職員研修センター統括指導主事等を経て、明星大学 特任准教授。元東京都小学校国語教育研究会会長。共著に『小学校 国語学習指導実践事典』(東洋館出版社)、『未来に生きる話し手・聞き手を育てる「話し言葉」の学習』(光村図書出版) など。



一人一人が考えをもち、 つなげ合い、交流することを 重視して。

